



令和 7（2025）年 7 月 1 日

校長だより Vol.4

『同じ星を見て歩いていきましょう！』②

生徒の充実した進路実現や自己実現を達成するためには、私たち教員の意識改革が不可欠です。

「未来起点で考える」という視点と、「フィードフォワード」「バックキャストिंग」といった戦略的思考法です。

まず、「未来起点で考える」とは、生徒一人ひとりの将来像を明確に描き、そのビジョンに向かって指導や支援を行うことです。『あんな風になってみたい』『あんな生き方がしてみたい』『どうしてもあの職業に就きたい』というようなビジョンに寄り添い、その実現のためには何を身につけるべきかという観点から指導計画を立てます。従来の教育は、過去や現在の枠組みから学びや進路指導を行う傾向がありましたが、これにより、生徒は自分の夢目標に対して具体的なイメージを持ち、自発的な学びへの意欲も高まります。

「フィードフォワード」とは、先を見据えて「これからどうすべきか」を追求していく考え方を指します。

過去の行動にもとづき、今後に活かすべき点を見出す「フィードバック」と異なり、**今後どうなりたいかというよう**な目標や将来像に向けて、具体的な策を考えていきます。教員は生徒の可能性に焦点を当て、「次に何ができるか」「どうすればもっと良くなるか」という前向きな視点で接することで、生徒自身も自己肯定感とやる気を引き出されます。このアプローチは、生徒が失敗や課題に直面した際にも、「次につながる経験」として捉えられるよう促します。

①まず、達成すべき目標を明確にし、現状を客観的に把握し（させ）ます。ここで、具体的な数値目標や行動目標を設定すると、より効果的です。②目標達成のために、具体的な行動を提案し、生徒が自ら考え、行動に移せるようにサポートします。③また、定期的に面談を行い、進捗状況を確認し、必要に応じてアドバイスやサポートを行います。文部科学省が推進する「令和の日本型学校教育」においても重要視されている指導方法であり、生徒一人ひとりが自ら学び、自発的に取り組む姿勢を育むためにも不可欠な要素となっています。実際の授業現場では、例えば進路指導やキャリア教育の場面で、成功事例や失敗談など具体的なエピソードを交えることで、生徒はより身近に感じ、自分自身の将来像と重ね合わせながら理解・共感しやすくなる傾向があります。このような事例紹介は、生徒の興味・関心を喚起し、「自分もできる」「努力次第で変われる」という前向きな気持ちにつながります。

「バックキャストिंग」といった手法も重要です。

これは、最終的な目標（例：希望する進路や自己実現）から逆算して、その達成までの具体的なステップを設計する方法です。教員はこの思考法を用いて、生徒一人ひとりのゴール設定と、それに至る道筋について共に考えます。

メリットとしては、①ゴールや目標を先に設定できる ②理想の姿を事前に共有できる ③教員自身が組織の一員としての意思決定がしやすくなる、等が挙げられます。反対にデメリットとしては、①現実とのギャップに中断してしまうこともある ②長期計画でモチベーション維持が困難になる、等が挙げられます。

また、「フォアキャストिंग」も注目されています。現状と過去のデータに基づいて未来を予測し、その予測に基づいて具体的な行動計画を立て、実行、評価、改善していくプロセスを教えることで、特に、時間軸を意識し、目標達成までのギャップを常に確認しながら、タイムリーな対応策を講じるように指導する手法です。

どちらの手法も、先生方が生徒一人ひとりの未来像や夢を引き出し、それを基盤として現在何をすべきか、という視点から指導することが重要となります。具体例としては、「4年後には公務員になりたい」と願う生徒には、その夢の実現までのステップ（高等学校で必要な科目選択、資格取得への準備、インターンシップ経験など）を逆算して示すことで、生徒自身が自分の未来像と今何をすべきかとのつながりを理解できるようになります。この方法は、生徒たちが自分自身の未来について主体的に考える機会となるだけでなく、自発性や創造性も促進します。

事例としては、「環境問題解決者になりたい」という生徒には、その夢達成までの具体的な活動例（地域清掃活動への参加、省エネ・リサイクル活動への関与など）を紹介しながら、「今」から始められる小さな行動についても伝えることができます。こうした事例は、生徒たちが自分ごととして捉え、自発的に学び・挑戦する意欲につながります。

これら三つのポイント — 未来起点、フィードフォワード、バックキャストिंग（「フォアキャストिंग」） — は、一見複雑そうですが、それぞれが相互に補完し合うことで、西高の教育活動全体の質と生徒への働きかけ方が大きく変わります。私たち教員自身が「未来志向」を持ち、生徒の夢や目標達成へのナビゲーターとなる意識改革が必要です。こうした意識改革を絵に描いた餅にしないためには、研修や情報共有はもちろん大切になりますが、それだけではなく、根本的に日常的なコミュニケーションスタイルの見直しも必要となります。

例えば、「できない理由」ではなく「どうすればできる」に焦点を当てた会話や励まし方へシフトさせることが重要で、その結果として、生徒一人ひとりが自信とモチベーションを持ち、自ら積極的に学び続ける姿勢へとつながれば、「自己肯定感」と「自己有用感」を高めることにも繋がります。



「学校風土」は魔法の杖

昨年(2023)の10月末になりますが、校長会による勉強会で公益社団法人 子どもの発達化学研究所主任研究員の大須賀優子氏の講演「不登校の子どもの実態と支援」を拝聴してきました。

不登校の実態を把握して適切な支援に繋げていくためには、経験則に頼らない支援がマストとのことでした。表面上は顕在化しなくとも、困り感を抱えた生徒はクラスや授業集団に一定数存在するそうです。(ASD…1～2%ADHD…3%LD…5～7%) また、何らかのメンタル不調を抱える生徒は約2割いるそうです。ですから、私たち教師は、表面上ではわからなくても、関係する集団には少なからずそうした生徒が存在することを忘れてはいけない、ということになります。不登校に至る理由はひとそれぞれ異なり、単純な理由によるものは少なく、様々な要因が複合的に関係していることが多い、とのことでした。

文科省の委託事業として不登校要因調査(2024.3公表)を行い、そこで得られた科学的データをエビデンスとした説得力のあるお話でしたが、その中で、先行研究から考える不登校の要因のモデルとして、なかなか変えようがない静的な要因と、そこにいる人の努力で、調整したり変えたりできる動的な要因がある、とのことで、「学校風土」は大変重要だ(「学校風土は魔法の杖」の話)という話が腑に落ちました。

「学校風土」とは・・・

学校に行けないという事実は、子どもと保護者を傷つけます。いじめは子どもを傷つけます。こうした傷つき体験をする前に、どのような関り(支援)が出来るかが予防的な見地から必要となるそうです。「問題がない」ように見える場合でも、見えていないだけであって、リスクは抱えている可能性を見逃さないことです。学校は“人”で変わる!!とは、よく使われる(聞く)言葉です。

私も同感ですが、これは感覚的なものではなく、やはり根拠がある、とのことでした。

「学校風土」については100年以上前から注目されており、子どもの発達リスクを予防し、学力向上に寄与することが知られている。(Thapa,2013)

Thapa et al. (2013) は、学校風土に関する206の研究を集めて検討し、学校風土には、「安全」「関係性」「教えと学び」「学校環境」「学校改善のプロセス」の5つの領域があるとし、学校風土の改善が不登校の予防に関連することを強調しています。

ポジティブな学校風土は、☆児童生徒のモチベーションを高め成績を向上させる。また、高校卒業率と大学進学率を高め中退を防ぐ。☆児童生徒の精神的・行動的健康に良い影響を与える。リスク行動や抑うつ症状の減少、帰属意識の増加に寄与する。☆学校風土改善を目的とした介入は、障害のある(困り感のある)児童生徒の回復力と帰属意識の向上につながる。☆教師の離職率を減らし、満足度を向上させる。

反対に、ネガティブな学校風土は、★卒業率の低下や学力低下につながる。★いじめ・暴力・自殺の機会を助長する。★心理的社会的・行動的適応度の低下(自尊心の低下、抑うつ症状、問題行動など)と関連する、等が挙げられるとのことでした。また、印象深かったのは、生徒には、「こうなって欲しい」という期待する行動を投げ掛け続けることが大切で、(成果はもちろん大切ですが、むしろ)その過程(プロセス)に寄り添いながら、タイムリーなフィードバックをしていくことがとても大事だというお話でした。『伴走する(寄り添う・コーチング)』指導・支援に大いに通じると感じたところです。

「安岡正篤さんのことばから」(そこはかとなく書きつくりました…)

安岡正篤(まさひろ)さんは、陽明学・東洋政治学・人間学の権威です。東洋思想研究所、日本農士学校、全国師友協会等を設立し、東洋思想の研究と後進の育成にあたった人物です。また、政財界のリーダーの精神的支柱として指導的役割を果たしました。「平成」の元号の考案者としても知られています。ある知人からの紹介で安岡氏の本を読むようになりました。以来、常にカバンの中に入れて持ち歩いている安岡正篤の名言集『天籟(てんらい)の妙音』から、少し紹介させていただきたいと思います。

一燈照隅 万燈照国(いっとうしょうぐう ばんとうしょうこく) ～ 一途に自分の真心を尽くす ～

人が振り向こうが、振り向くまいがそれが問題ではない。ただ一途に自分の真心を尽くす。そうすると、そんな一隅を照らす行為に励まされた人が、私も一隅を照らすような行為をと決意されて、いつしか輪は広がっていくものだ。

智慧の学問・徳の学問 ～ 新しい時代を創造する人 ～

新しい時代を創造するような人物はどうして生まれるかというと、これは知識の学問や技術からは生まれない。やはり智慧の学問、徳の学問、そういう教育の中から出てくるのである。

発見の手がかり ～ ふとした工夫 ～

女性の患者の胸にぴったり自分の耳をあてるのを遠慮した医者が手近にあった一枚の紙を筒にしてあててみた。心臓の鼓動がはっきり聞こえた。聴診器はそこから発明されたのだ。

